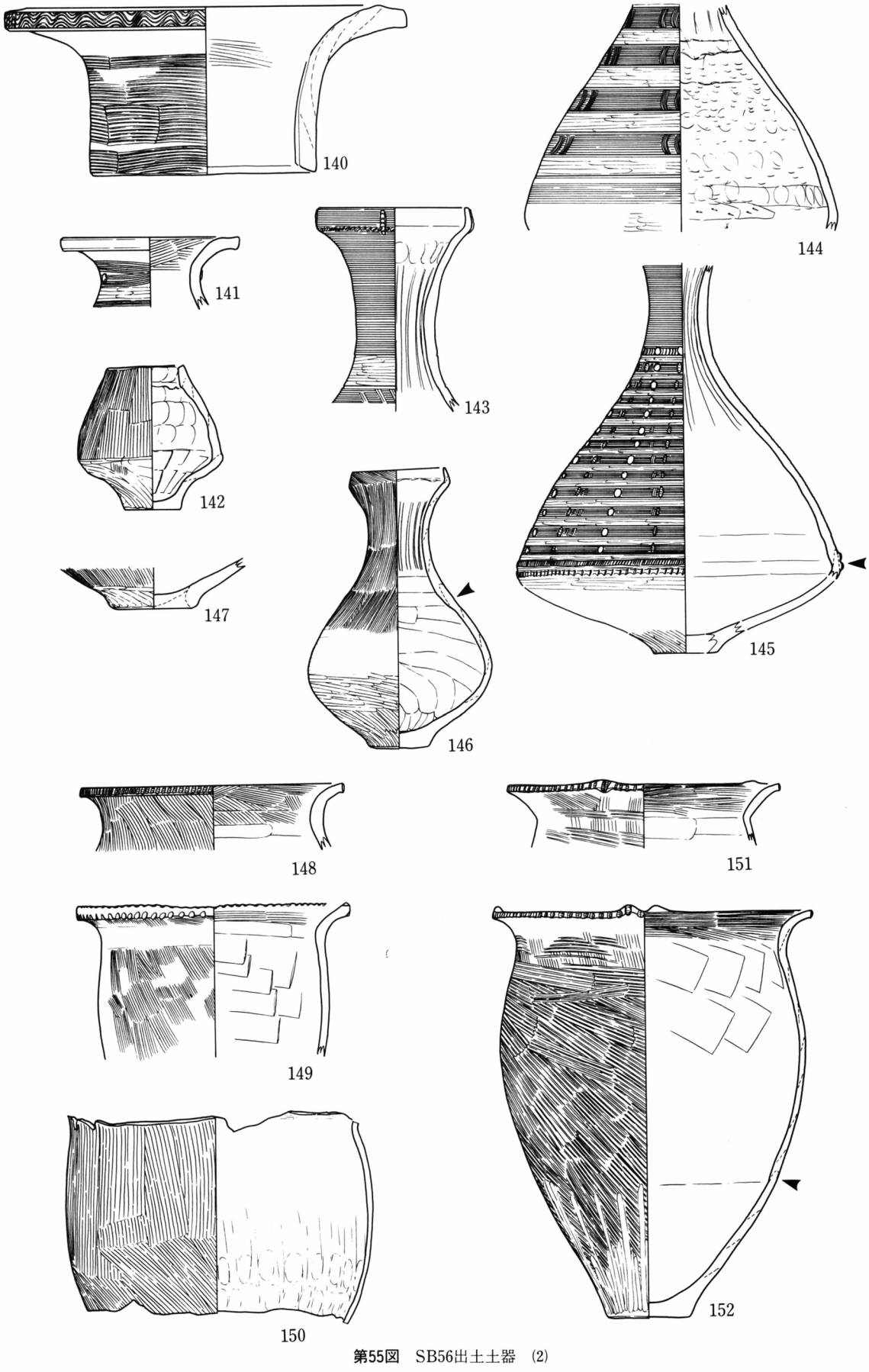
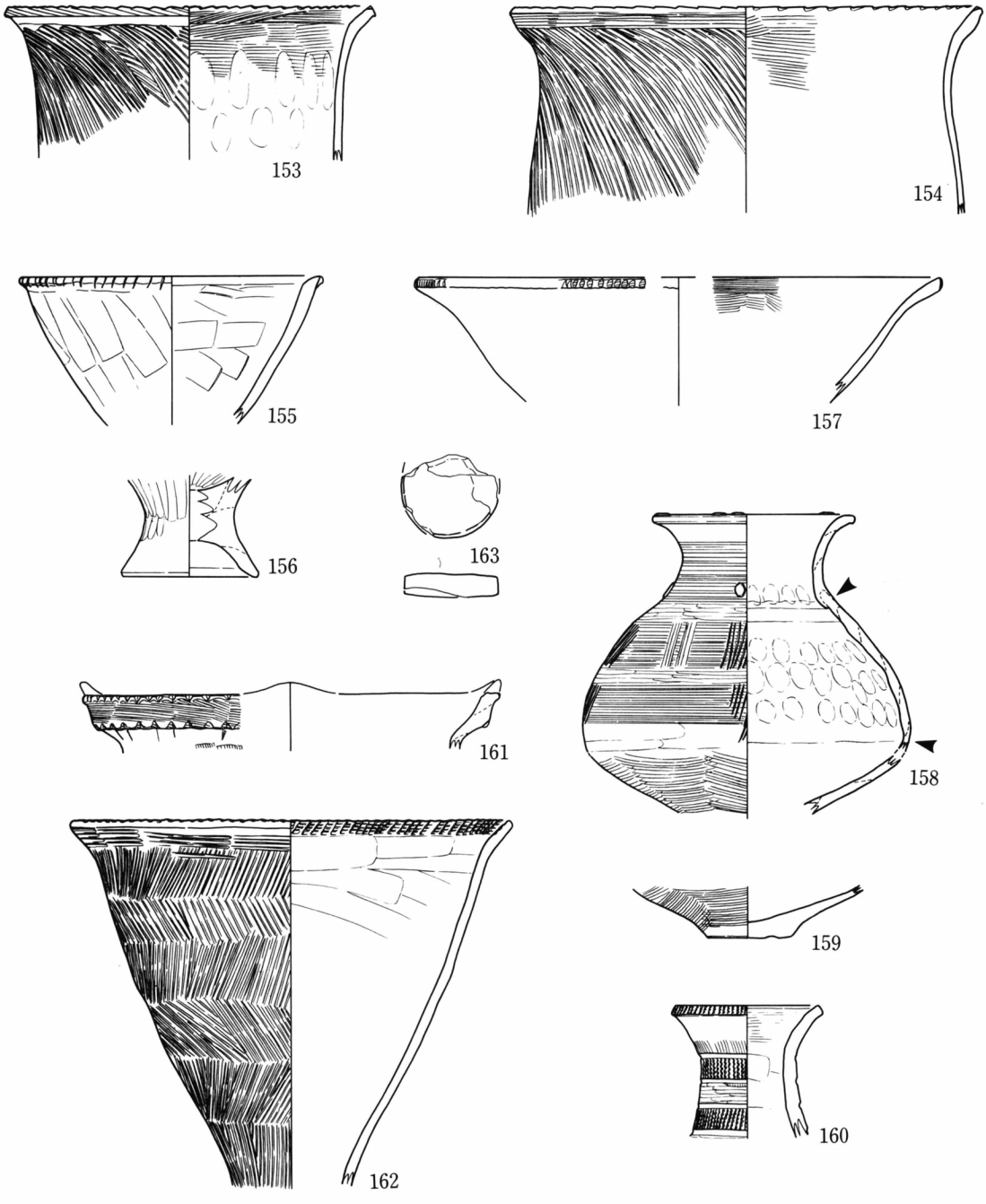


第55図　SB56出土土器　(2)



第56図　SB56出土土器　(3)

径はもう少し小さくなるかもしれない。

158・159はB系統壷。同一個体の可能性が高い。158は形態的にA系統に接近するので、折衷型と考える。縦位直線は沈線と櫛の交互施紋。床面直上で潰れた状態で出土した。159は底部にドーナツ状のくぼみを持つ。底部成形はbか。

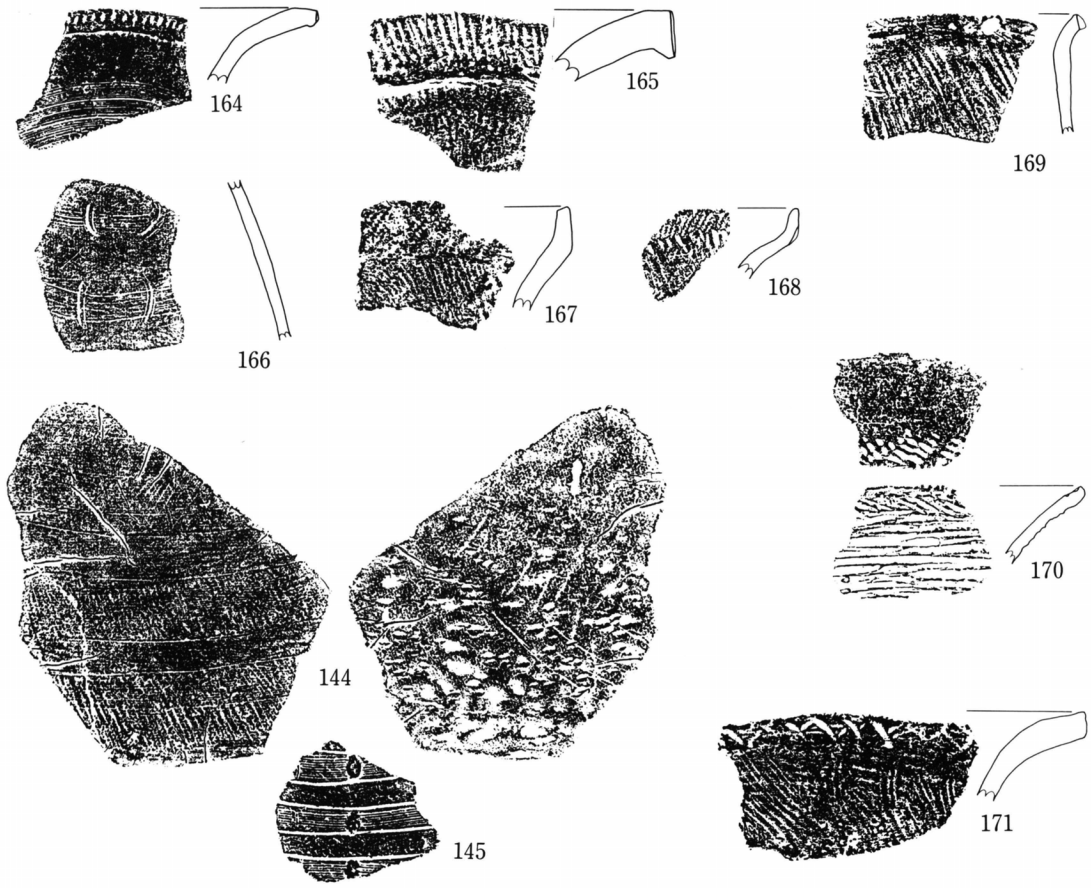
160はCa系統の二枚貝刺突紋系壷である。細頸であるが、体部と頸部の境界が明瞭かどうかは不明。どちらでも有り得る。

161は有段波状口縁甕。162は深鉢 Cb。口縁部内面の櫛刺突紋は押し引き状である。

164は櫛描紋系の太頸壷A。165は無紋系か篦櫛併用紋系の太頸壷A。166は付加沈線の欠落した櫛Ⅰ種A類の単帯櫛描紋。縦位弧線は櫛Ⅰ種A類。

167・168は縄紋系細頸壷 Aa。

170は深鉢 Cb。171は甕D。口唇部に斜格子紋。169は甕 Ad。



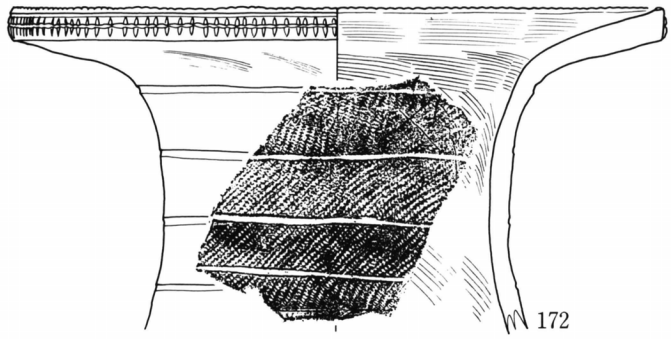
第57図　SB56出土土器　(4)

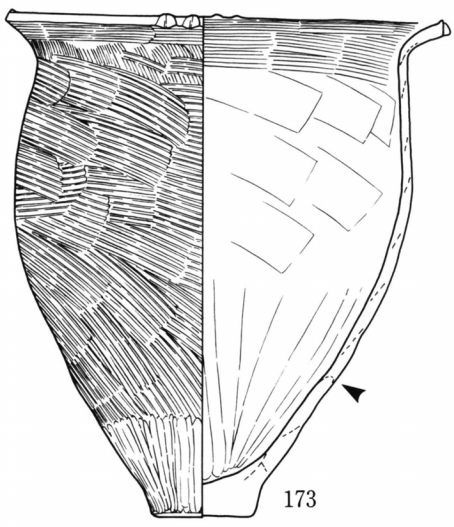
SB59　172は縄紋をもつ太頸壷A。口唇部は沈線を施した後に板による刻みを加える。上端にも刻みがある。頸部は縄紋の後に沈線を4条施す。黄褐色。

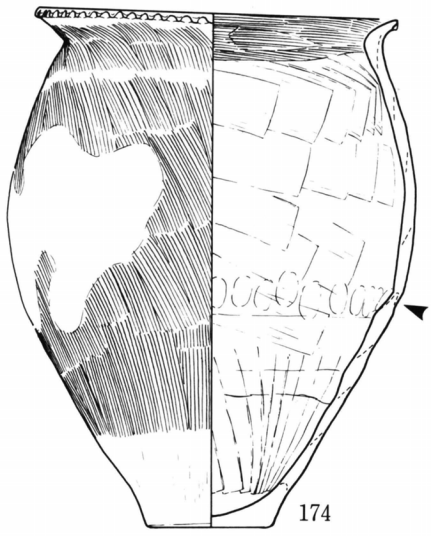
173は甕 Ac。口唇部は2ケ一対の部分圧痕を円周4分割の位置に施す。体部はハケメ→二枚貝→下部に研磨の順で調整する。

174は甕 Ad。体部径が口縁部径を凌駕する。体部中位やや下部に成形単位のつなぎ部分が明瞭に認められる。

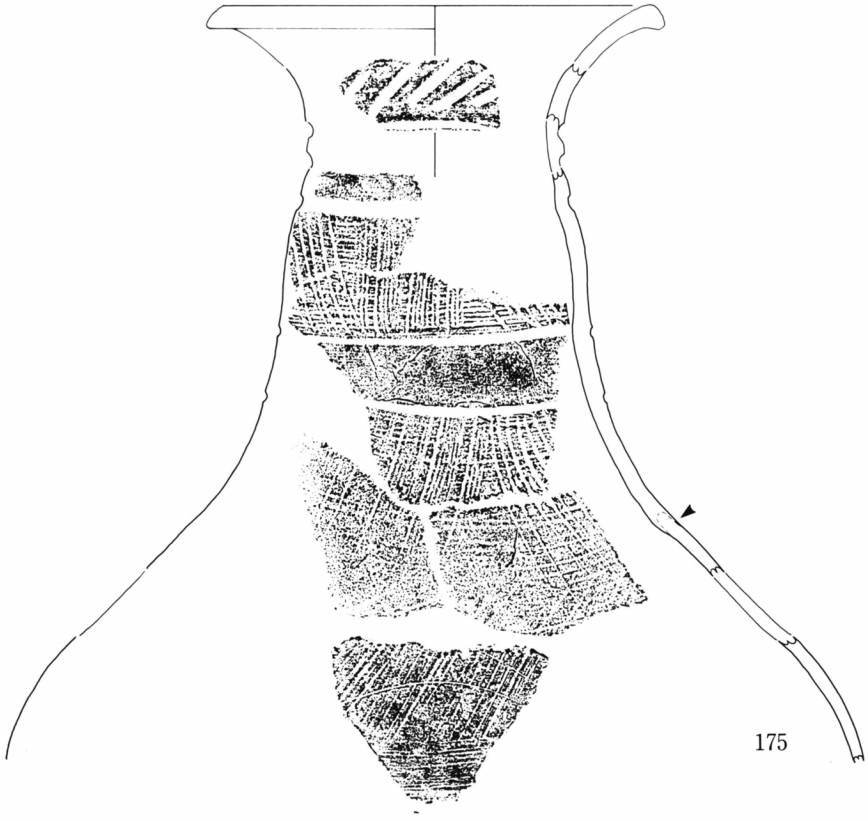
175はB系統壷。頸部はやや細身で長頸と言ったほうがよい。櫛描紋帯部分は櫛II種b類による直線紋のあと縦位に櫛II種b類と沈線による交互施紋が施される。口縁部外面には幅の広い沈線によるハネアゲ紋、体部上半には沈線による連弧紋が施される。典型的である。





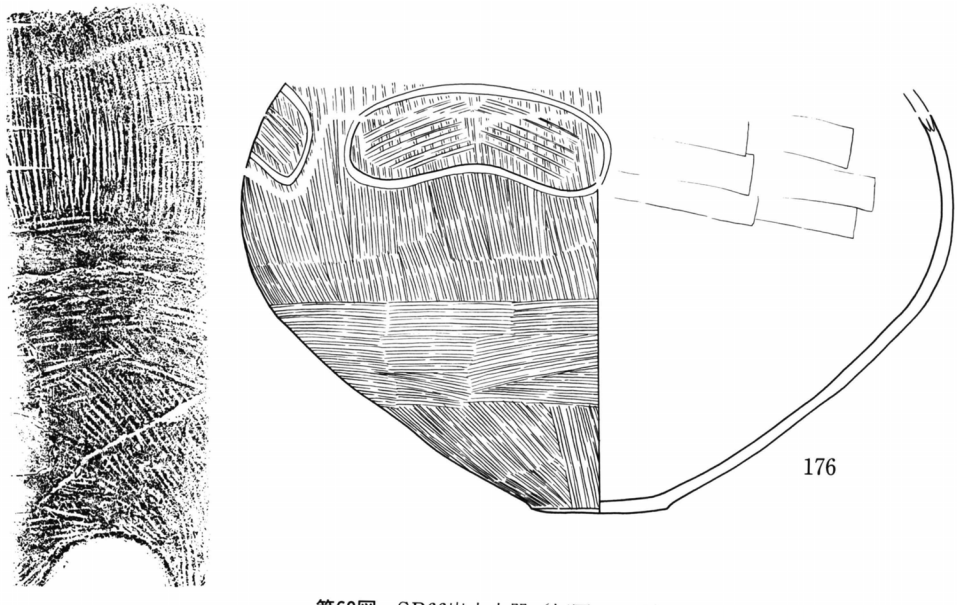


第58図　SB59出土土器　(1)



第59図　SB59出土土器　(2)

ＳＢ66　　176はＣ系統壷。体部は二枚貝調整で、その後に二枚貝による連弧紋を施し、それを沈線で囲む（連環状弧紋）。底部はやや突出気味で座りが悪い。



第60図　SB66出土土器（拓図１：４）

ＳＫ73　第62図左列184・185・191が最下部から出土した。右列はそれより上部からの出土。

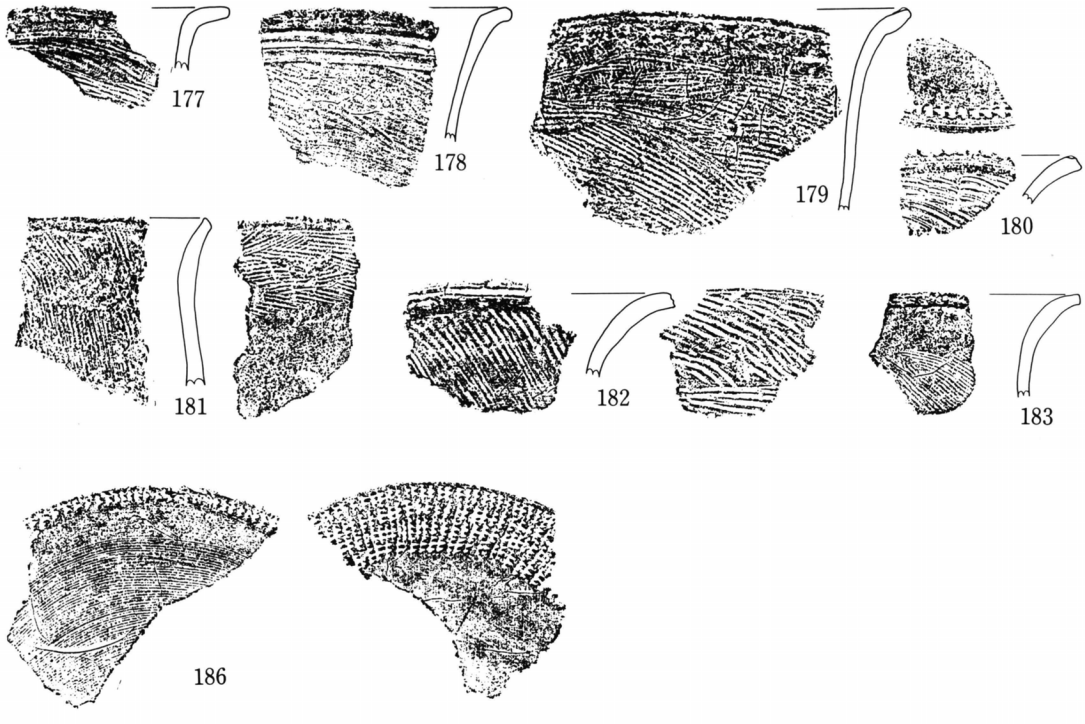
177・178は甕Aa１．口唇部には円周４分割の位置に単独圧痕が施されるはずである。179・180は甕Aa２．口唇部上端は二枚貝刻み。181は甕 Ad。182は深鉢 Ca。体部外面、口唇部、口縁部内面すべて二枚貝調整・施紋である。183は甕 Ad。

184・185は０期壷。二枚貝直線紋（二枚貝腹縁の弧状静止痕を残さない直線紋）の頚・体部２帯構成で典型的な朝日式壷である。接合しても完全にはならない。混入であろう。

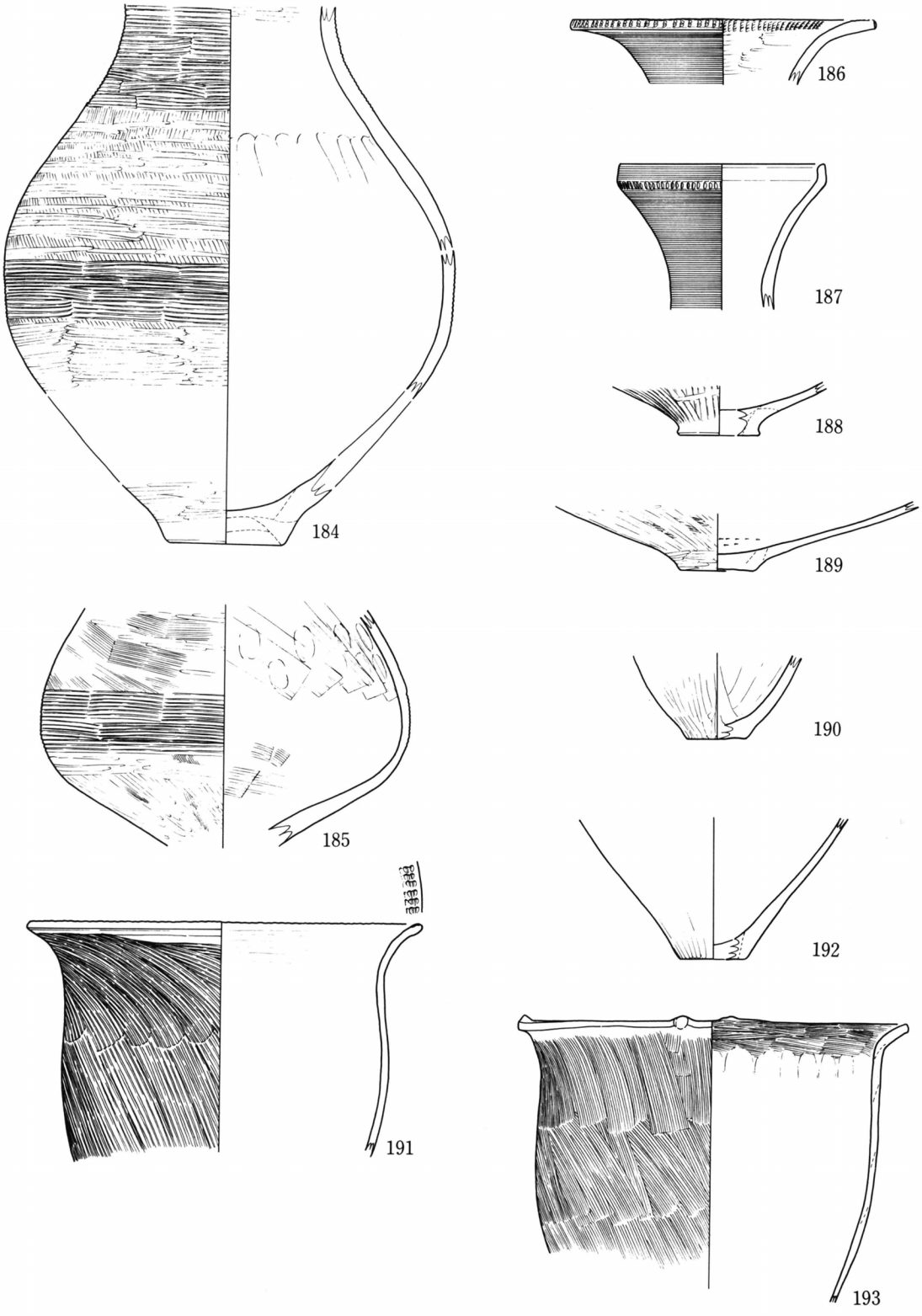
186は口縁部内面に二枚貝刺突紋を施す太頚壷A。口唇部にも二枚貝刻み。頚部櫛描紋は口縁部にまで及びⅠ期の典型であることがわかる。黒色仕上げ。187は細頚壷 Aa。口縁部屈曲部には板？によるD字刻み(→方向)。黒色仕上げ。188は研磨を加えない突出した底部。成形はｂか。189は丁寧な研磨を施す底部。外面は二枚貝調整の後に研磨が加えられる。底部成形ａか。底部内面には擦痕がある。黒色仕上げ。折衷型。

190は鉢。全面研磨。黒色仕上げ。

191は甕 Aa ２。口唇部上端は二枚貝刻み（→方向)。192は体部下半と底部外面に丁寧な研磨を施した底部。193は甕 Ad。口唇部には円周４分割の位置に指頭による単独圧痕。



第61図　SK73出土土器　(1)



第62図　SK73出土土器　(2)

SK74　SB19に切られる土坑である。内部は炭化物と土器片が密に充満していた。接合の結果、完全になるものの多かった点は、他の土坑と大きく異なる点である。土器廃棄用の土坑といった趣である。

194は0期大形壷。頸部直線紋は二枚貝腹縁の静止痕が特徴的に観察できる。口縁部は二枚貝施紋の後、上下に指頭圧痕を加える。口縁部内面には二枚貝背面で直線紋を3条施す。

195は頸部に二枚貝直線紋を施す太頸壷A。口縁部はやや垂下し、口唇部には板？で刻みを施す。196は頸体部界にハケメ工具によって段を作る。頸部櫛描紋は細密な櫛Ⅰ種A類。色調は茶褐色。体部の研磨は雑である。

197は細頸壷 Aa（櫛描紋b類；複帯4段）。直線紋は櫛Ⅰ種a類で縦位弧線は3・3・3の櫛Ⅲ種。体部内面は擦痕が顕著である。198は無頸壷。口縁部施紋は磨滅しているが波状紋のようである。

199は櫛Ⅱ種b類の櫛描紋を施す太頸壷である。調整は体部下半をみる限りでは二枚貝調整である。施紋は頸部から体部にかけて横型流水紋。口縁部内面は流水紋の構図がくずれ、扇形紋で分割した直線紋帯を縦位の直線で分割している。口縁部の外周には2本1対の刺突紋がめぐる。主紋様単位は櫛描紋からなるが、構成は明らかに大地形壷と関係がある。折衷型である。黒色仕上げ。

200はB系統細頸壷。口縁部内面には3ヶ1単位の圧痕が円周4分割の位置に施される。櫛描紋は櫛Ⅱ種b類。黒色仕上げ。

201は系統不明の受口状口縁壷である。口縁部屈曲部上下の波状紋はどちらもハケメ工具で施されている。調整・施紋を同一工具で行う甕Dと同じ系統の壷かもしれない。茶褐色。

202は口縁部に突起をつくる壷である。復元では円周4分割の位置にあるが、3分割かもしれない。

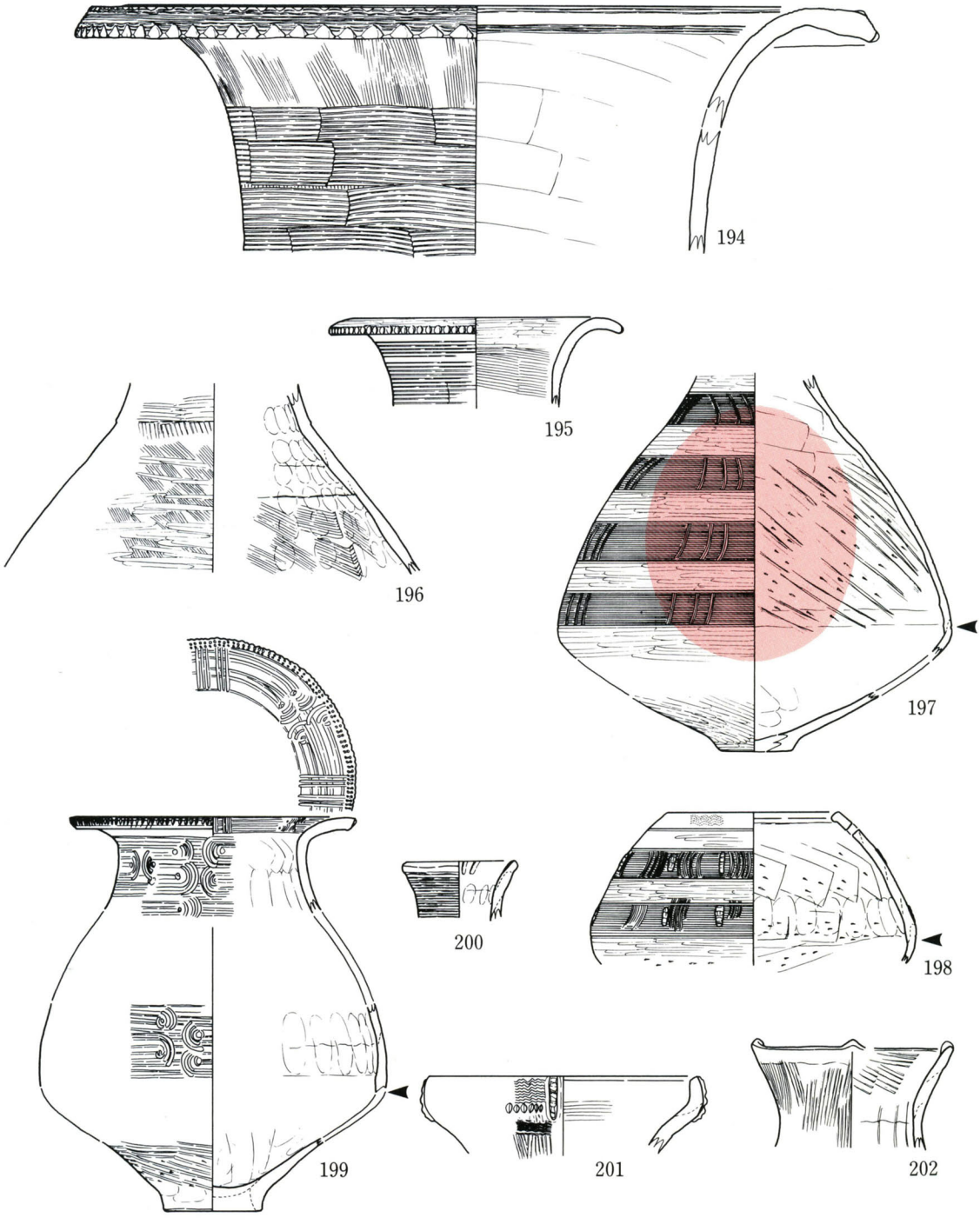
203は甕 Ab。Ⅰ－1b期ではただ1点である。204は甕 Aa。体部下半部の調整はハケメではなく二枚貝である。205～208は甕 Ad。口縁部径＞体部径、口縁部径≧体部径などある。規格による定形化は認められない。206・207の底部成形はc。

209は鉢の脚台か土製品。210は高杯脚部で杯部には研磨が施されている。

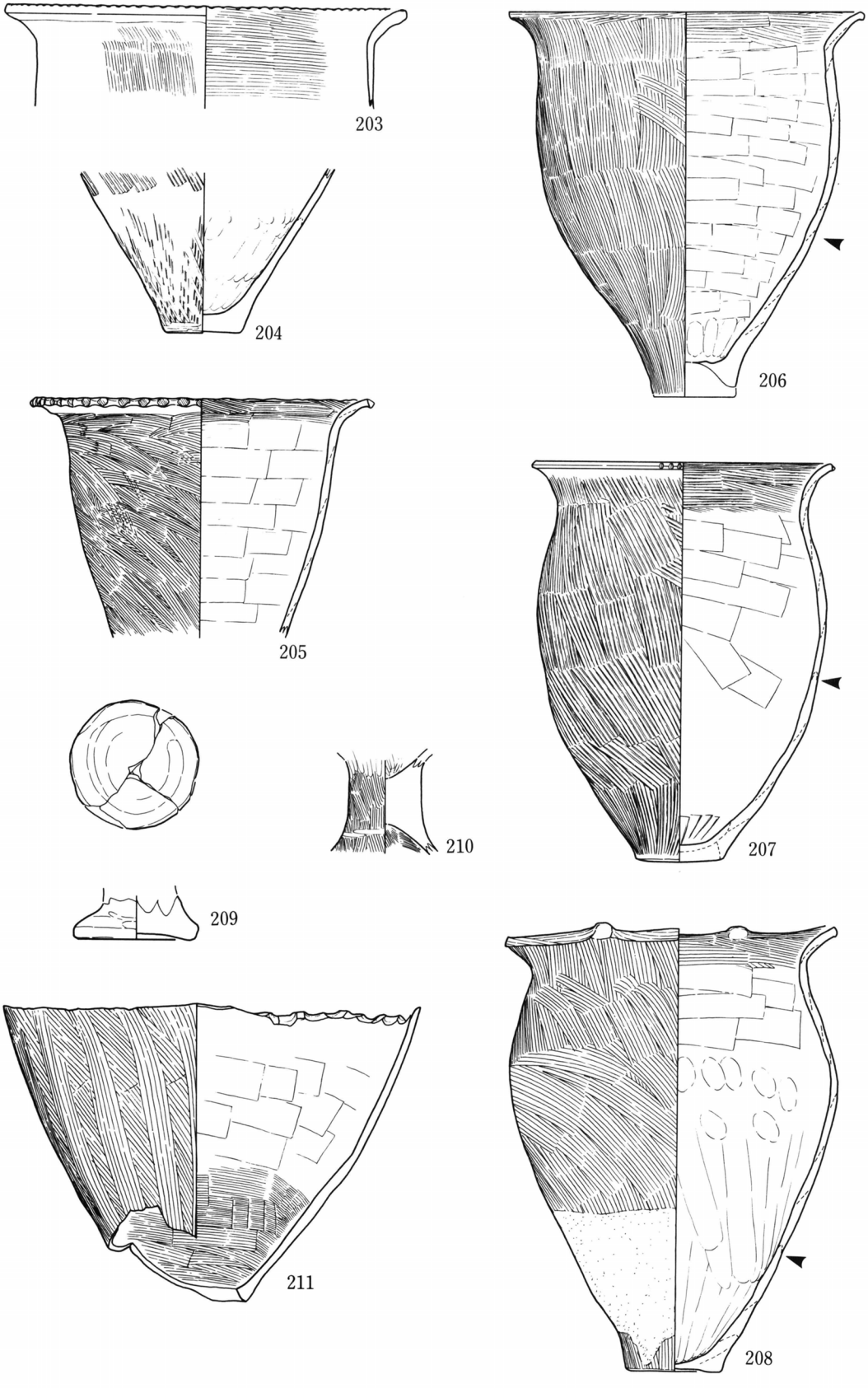
211は体部上半が意図的に打ち欠かれ、下部も抜かれた甕 Ad。

212・213は太頸壷B。212は、口縁部外面に斜格子紋が施され、B系統としては珍しい。頸部紋様は、櫛Ⅱ種b類による直線紋が整っている。縦位は上段が沈線4条による鋸歯紋、下段が櫛Ⅱ種b類と沈線による交互施紋である。体部上半の連弧紋はそれぞれ→方向のものが←方向に施される。213は、口縁部外面に通有の幅広いハネアゲ紋。頸部の隆起部分は沈線の斜線。下部の櫛描紋は断続施紋で各単位の端は切り合う。体部上半の連弧紋はそれぞれ→方向のものが→方向に施される。この212と213は、前者がよりA系統土器に傾斜しているとすれば、後者はまだ続条痕紋系土器に近いということができる。

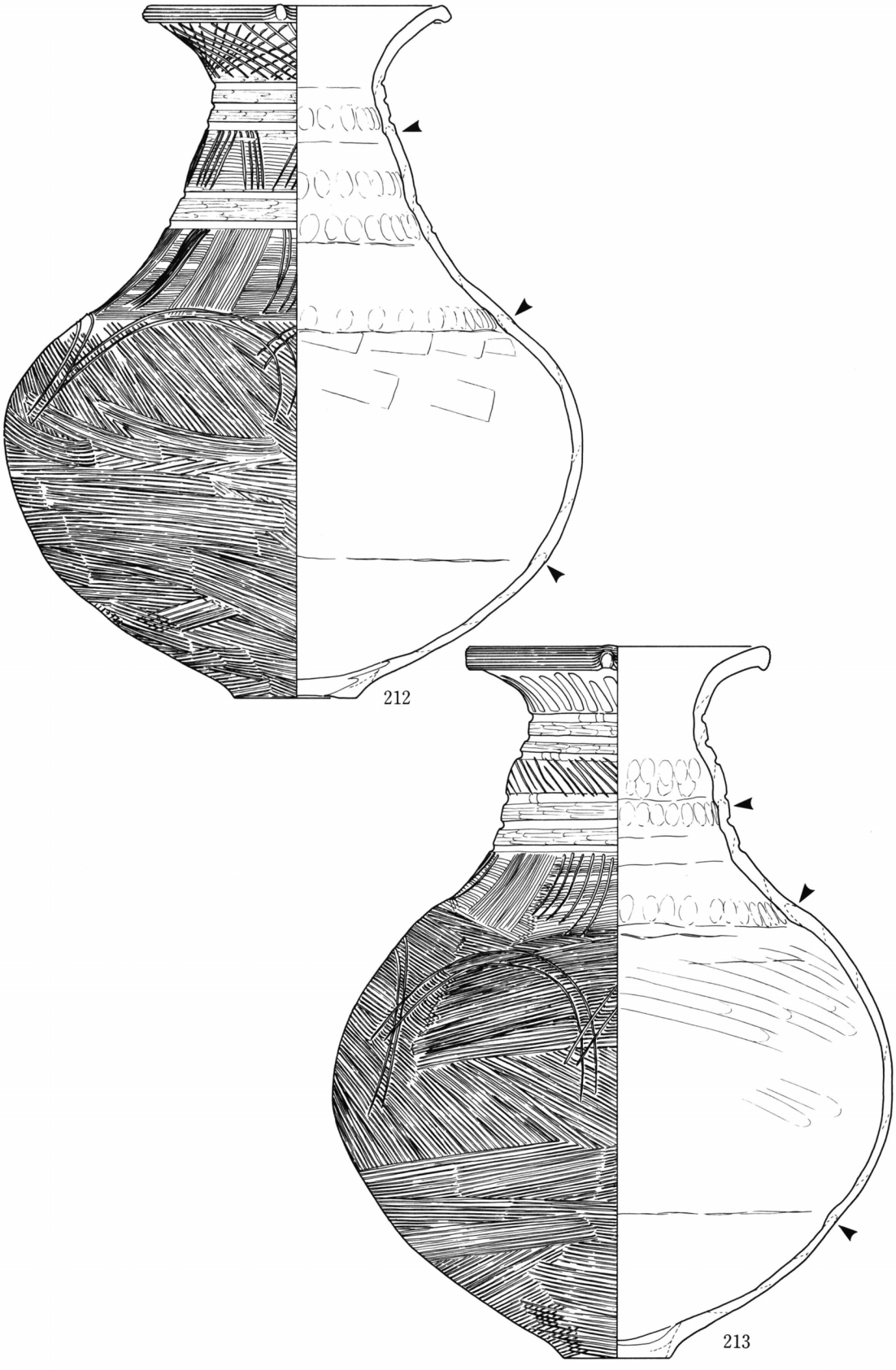
214は篦描併用紋系の太頸壷A。215は同一個体ではないが、このような感じになる。口縁部は強いヨコナデが加えられる。口唇部の施紋は沈線を2条施した後に、ハケメ工具で



第63図　SK74出土土器　(1)



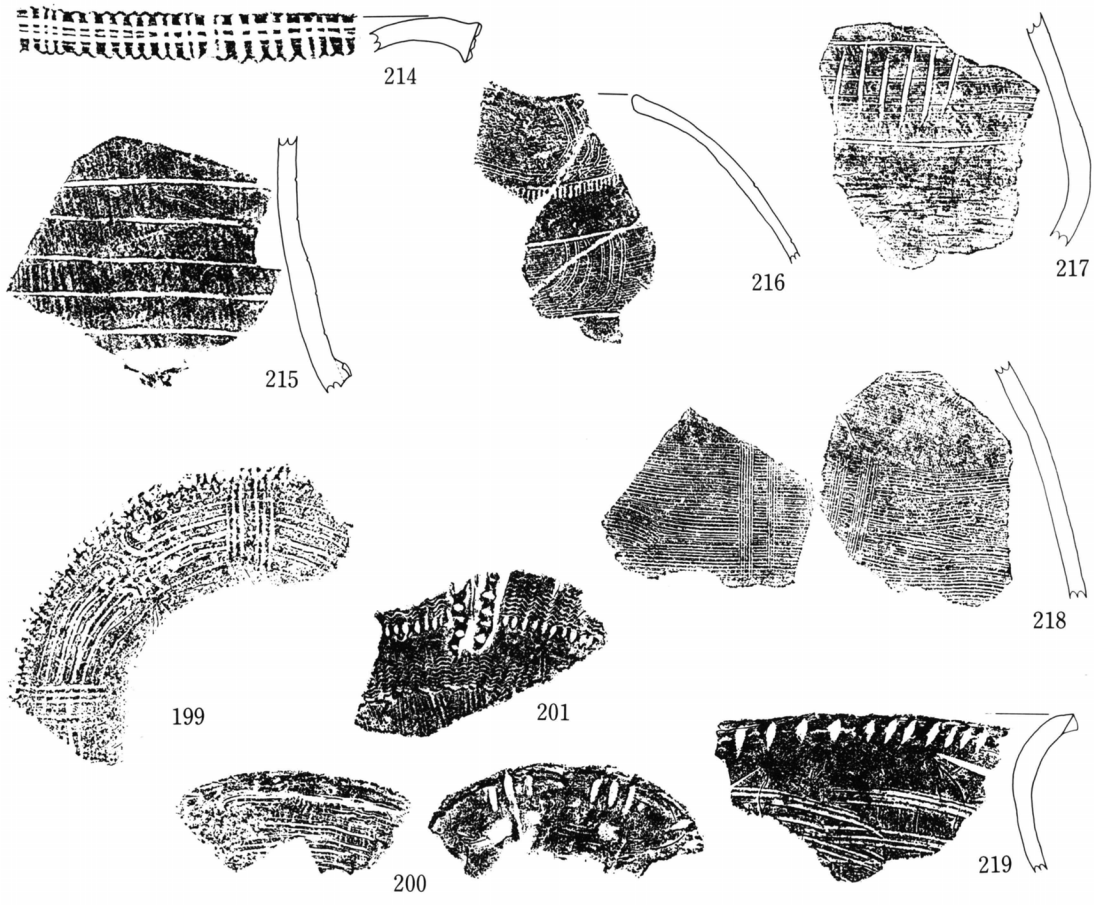
第64図　SK74出土土器　(2)



第65図　SK74出土土器　(3)

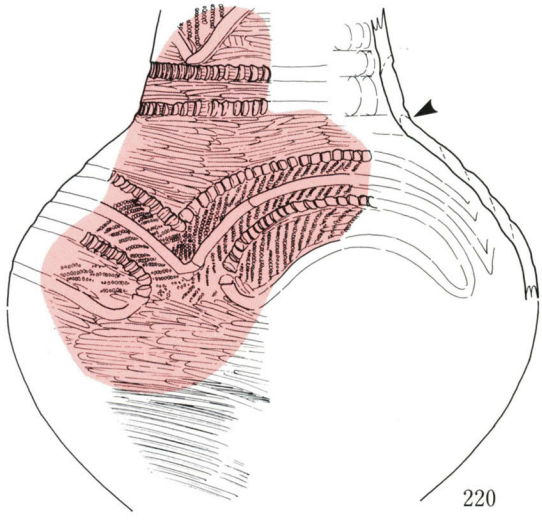
刻む。215は頚部下端に突帯を持つ。216は無頚壷A。櫛描紋上段は複帯波状紋、下段は複帯直線紋。縦位弧線は（2・2・2）×2の櫛III種。217は櫛描紋*d*類。櫛I種A類。218は4帯以上の複帯からなる櫛描紋*a*類。原体は櫛II種b類。

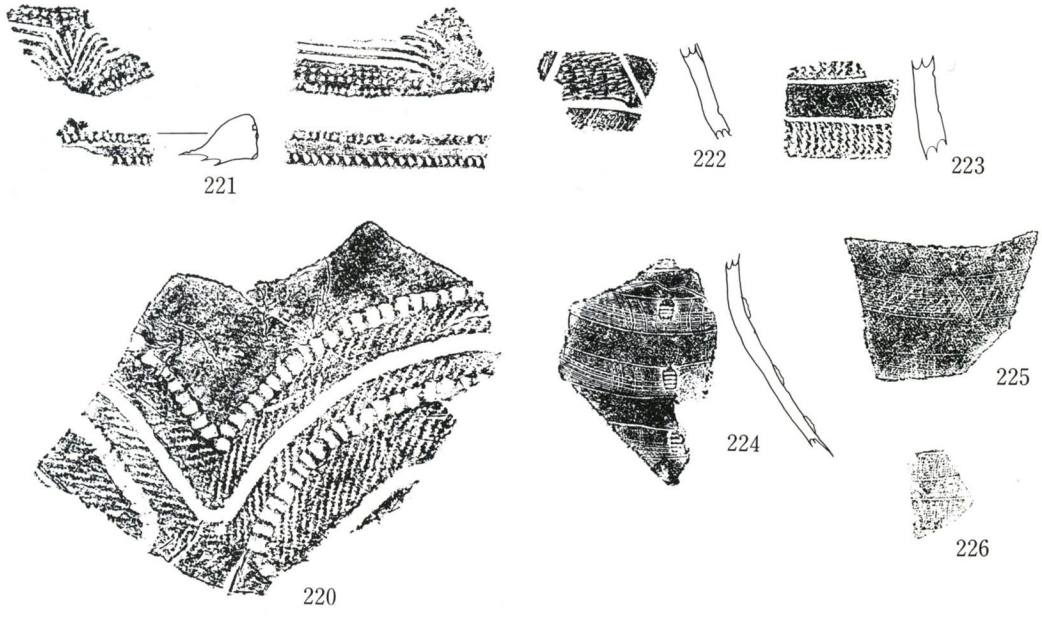
219は甕 Ac。



第66図　SK74出土土器 (4)

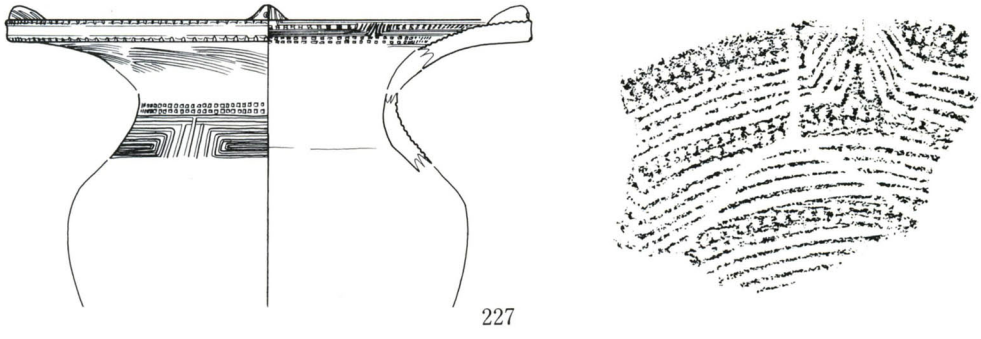
ＳＫ96　220は中部地方東部からの搬入品。赤彩が施される。221は大地形壺。灰白色で、口縁部はＡ系統との折衷型。222は三角形のなかに櫛Ｉ種Ａ類の引っ掻いたような施紋がある。224は櫛描紋ｃ類。灰白色。





第67図　SK96出土土器

ＳＫ107　227は221と酷似するが接合関係はSK106のほうにある。灰白色。Ａ系統に接近。折衷型。



第68図　SK107出土土器

ＳＫ140　SB30に切られる土坑内部からの出土である。

228は太頸壷Ａ。頸部の櫛描紋（櫛Ⅱ種ｂ類）は整った構成を見せず、単位も短く断続的で上下に揺れており、一見雑な印象を受ける。これを「下手」といえばそれまでだが、細頸壷などにもまま見受けられるので、一つの手法として独立していると考えたほうが良いようにも思う。明るい灰色。

229は頸部に刻み突帯をもつ縄紋系太頸壷Ａ。

230はＢ系統壷。１は連弧紋が施されている。櫛Ⅱ種ｂ類の直線紋を縦位の沈線で区切っている。赤褐色。

231はＣ系統か。極めて彫刻的な施紋である。部位は体部中央であろうか。黄褐色。

232は口唇部が外傾するだけでなく直交する刻みが施され、Ｃ系統壷の手法と関係がある。Ｃ系統の縄紋系壷であろうか。

233～240は壷底部である。成形はａがほとんどだが、他に235や240のような粘土盤の据え置き（底部成形ｄ）がある。これは古い様相で０期に多い特徴である。底部内面がやや凹面をなすのは成形ａの特徴である。

241～244（232も？）は続条痕紋系土器の組成を示す好資料である。

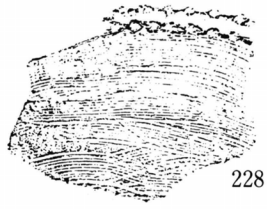
241は太頸壷Ca。頸部より上の復元に自身はあるけれども、体部上半の復元は心許無い。しかし、二枚貝条痕の上に連弧紋が施されることは間違いないし、この手法は古い様相で注目してよい。口縁部は屈曲部外面に二枚貝刻みが→方向に施される。口縁部の斜格子紋は鋭い切り込み状の沈線によって施される。灰白色。

242は太頸壷Ca。口唇部に二枚貝条痕が施される。頸部はおそらく二枚貝条痕後にナデ消される。灰白色。

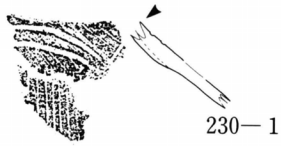
243・244は深鉢Ca。体部外面、口唇部、口縁部内面に二枚貝調整・施紋が施される。243は体部の張りがやや強くなっている。

245は甕Ｄ。

246は混入。Ⅱ期後半の細頸壷で頸部に隆起部が作られる折衷型。口縁部内面には爪形紋が施される。体部紋様部はかなり上半へ圧縮されている。


228

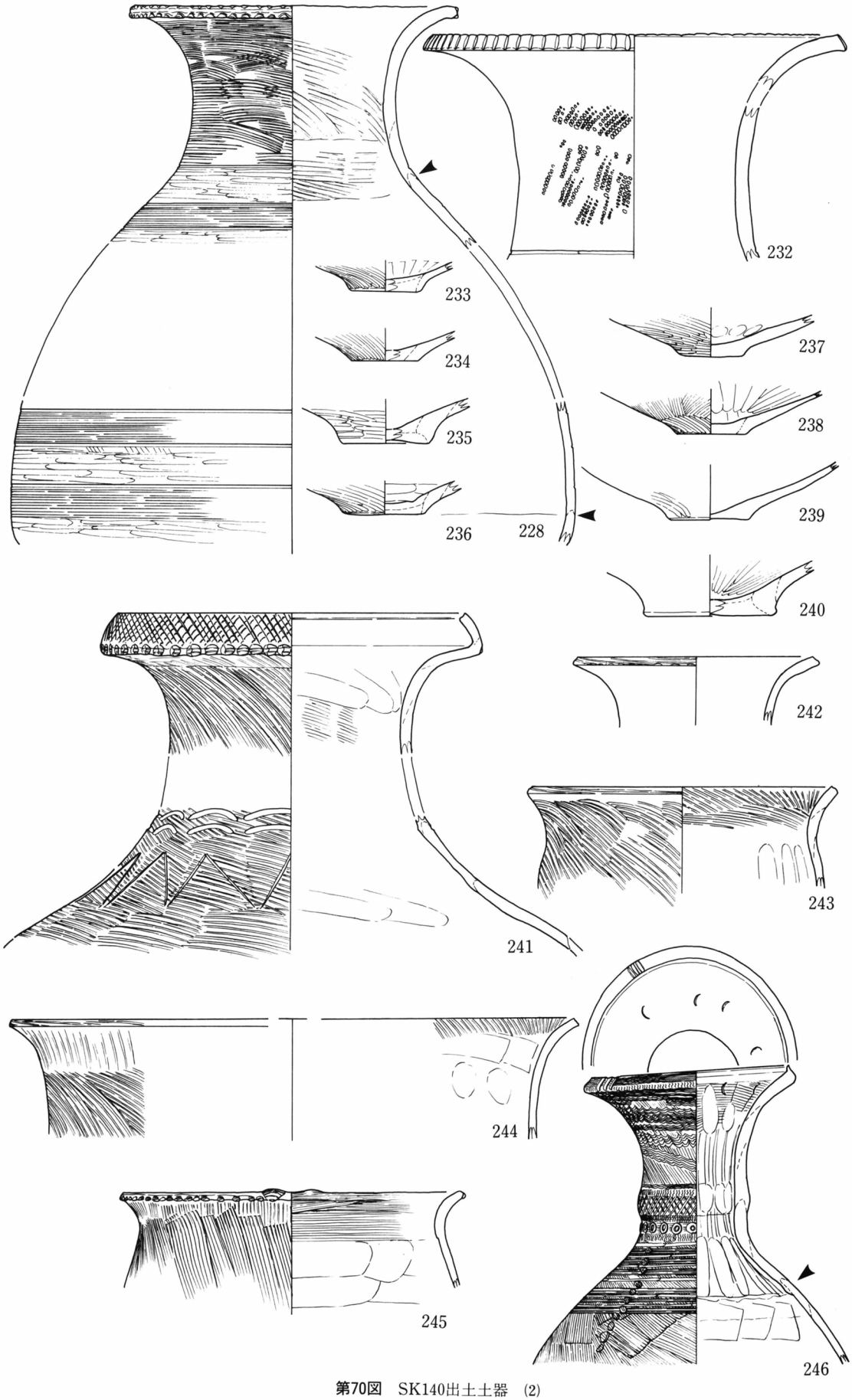
229


230－１

230－２

231

第69図　SK140出土土器　(1)

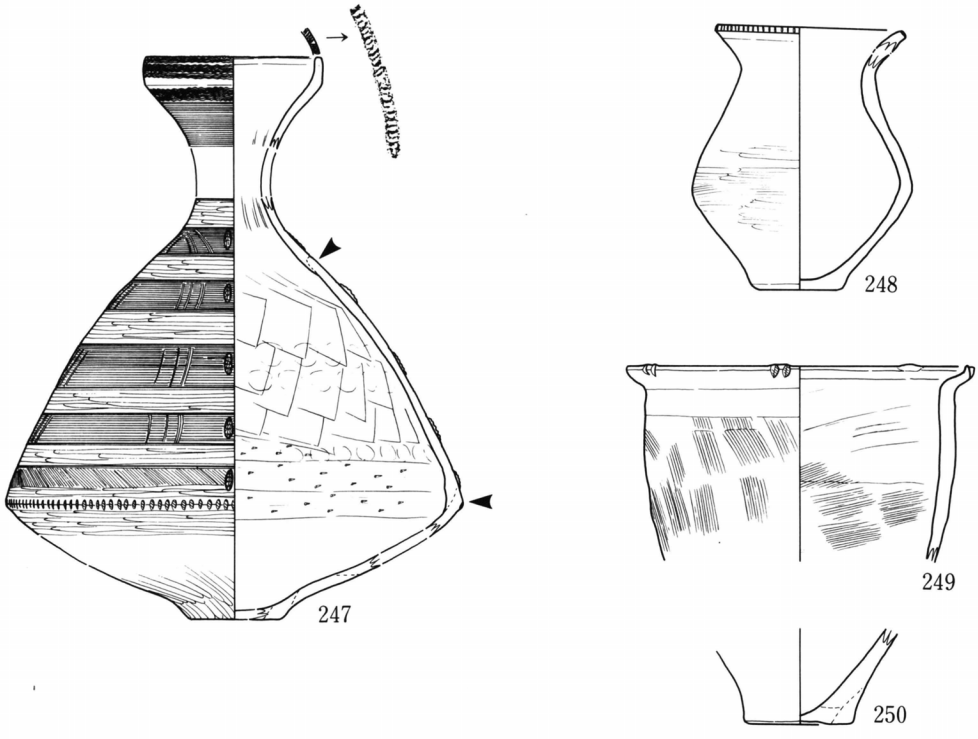


第70図　SK140出土土器　(2)

ＳＫ151　247は櫛描紋*b*類だが、口唇部には幅の狭い切り込み状の刻みが施される。刻みは図示した部分で「ハ」字状に傾きを変える。口縁部外面は波状紋２段、体部には櫛Ｉ種ａ類を原体に単・単・複・単で施される。縦位弧線は２・２・３の櫛III種である。櫛描紋帯は最下段が無施紋でハケメをそのまま残す。体部の上下境界は突帯を作らず刻みを施している。手法的には古い様相である。黒色仕上げ。

248は小形壷。体部は研磨が施される。

249は甕Ａｄ。口唇部は２ヶ一対の部分圧痕が円周４分割の位置に施される。口唇部はやや上方にそって微妙な受口をなす。250はやや上げ底の甕底部。成形はｃ。



第71図　SK151出土土器

ＳＫ181　251は櫛描紋*a*類。櫛II種ａ類で複・複・単に施される。縦位施紋は直線紋と波状紋の交互施紋で、３・３の櫛III種を３回施して１単位とする。黒色仕上げ。252は櫛描紋*b*類。複帯３段で、縦位弧線は２・２・２の櫛III種。だいたい縦位弧線は互い違いに向きを変えるのが普通だが、拓本では中段左端の弧線の向きが変わっていない。黒色仕上げ。

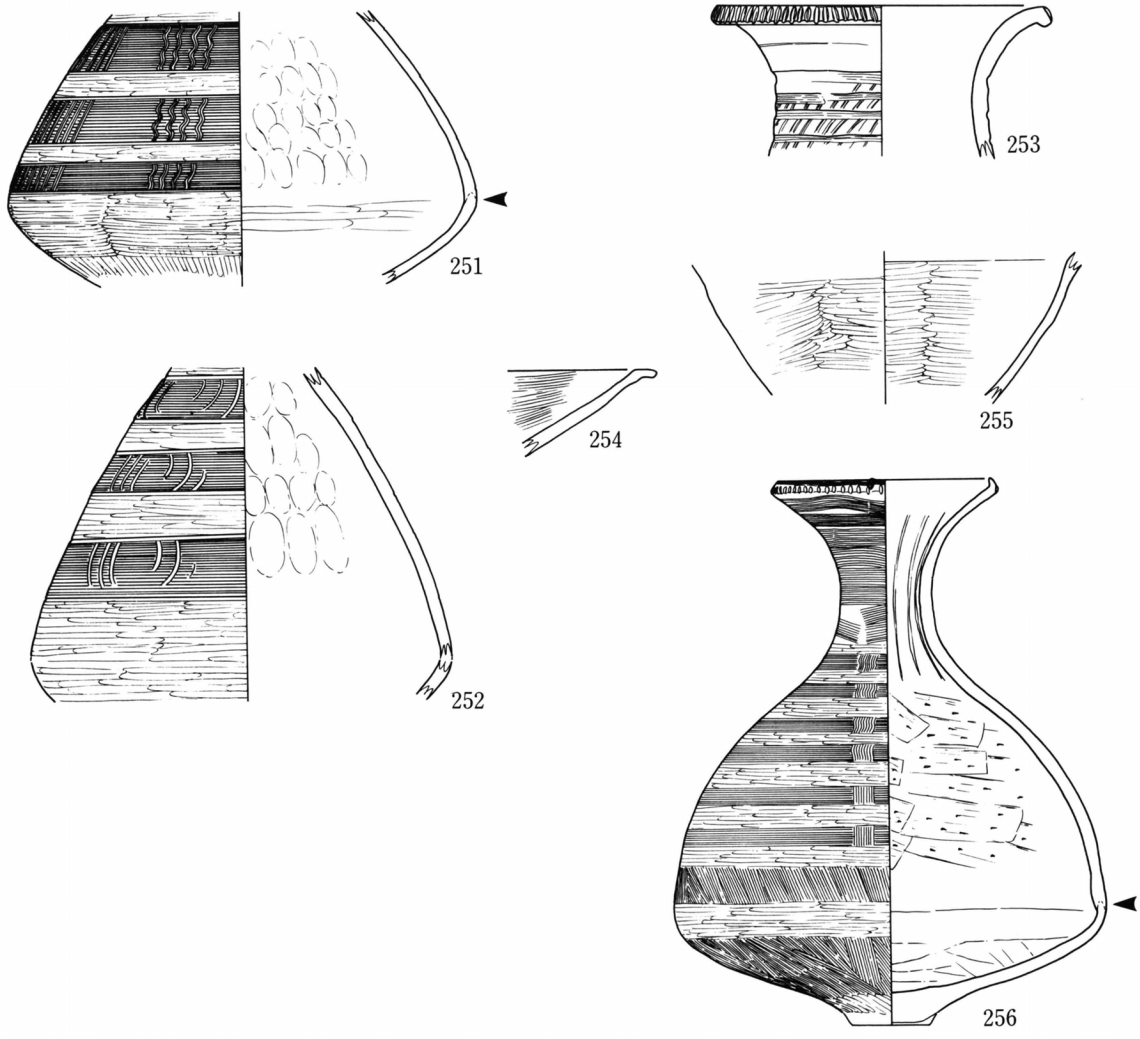
253はＣ系統の壷。頸部は地の条痕を完全に消さないままに沈線を施しており、古い様相を見せる。

254は高杯。255は高杯か鉢。どちらにしても精製。

256はII期細頸壷Aaの混入。縦位弧線は櫛描直線紋施紋後に一気描きで施している。胎土には砂粒が多く含まれているので、内面の擦痕は顕著になっている。

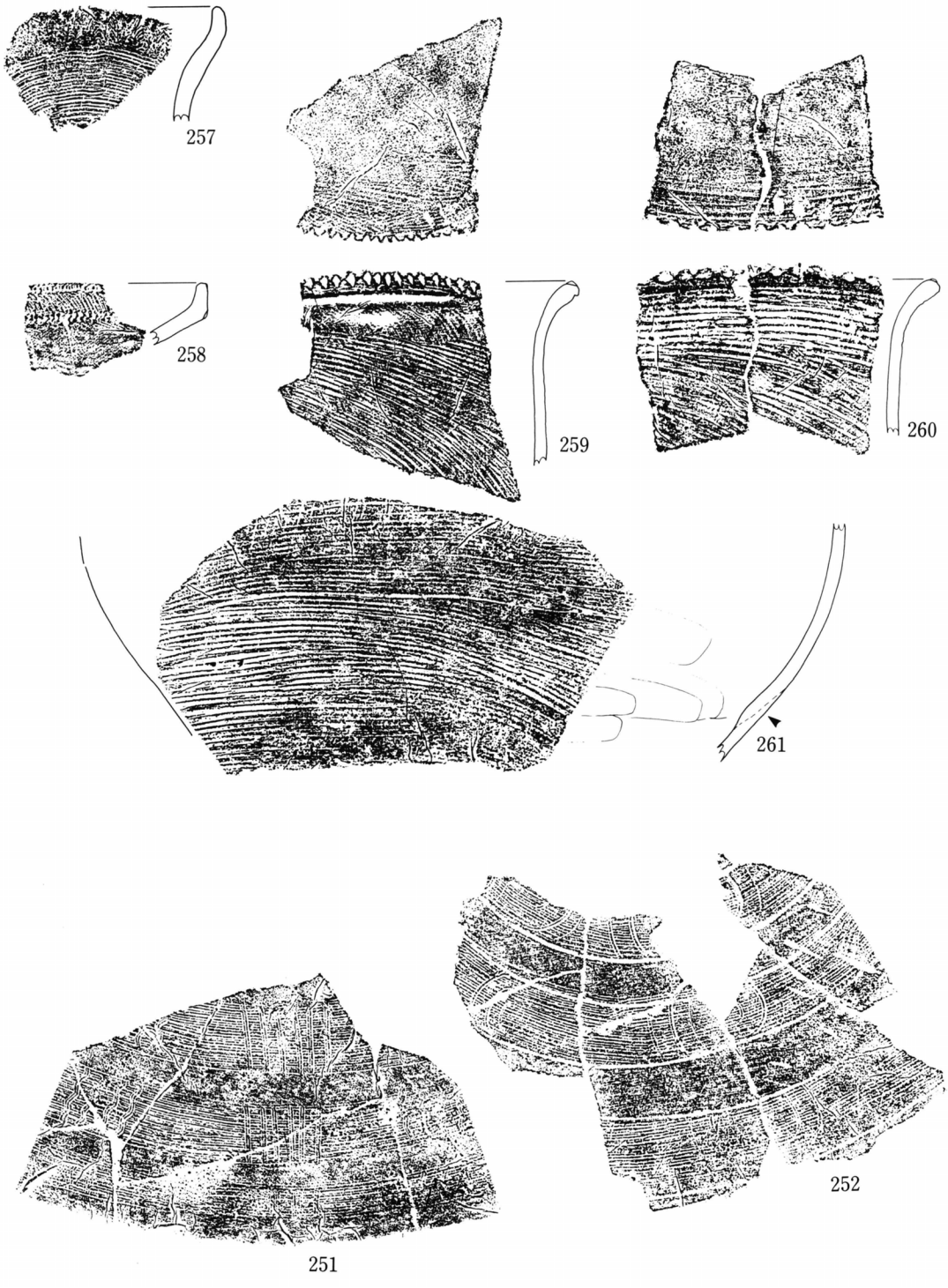
257は細頸壷Aaの口縁部。口縁部には波状紋が施される。屈曲部の刻みはない。

258は精製の鉢。黒色仕上げ。



第72図　SK181出土土器　(1)

259・260は甕 Aa 2 。259は口縁部直下に一次調整のハケメがよく観察できる。
261はＢ系統壷の体部下半。



第73図　SK181出土土器 (2)